「妊産婦の精神面支援とその効果に関する研究」

分担研究者　中　野　仁　雄

【要約】

本年度は３項目のリサーチクエスチョンに対して研究を行った。

１．マタニティーブルーズなど産後精神障害の実態と対策は？

オープンフォーラムを開催し、討論を経てマタニティーブルーズと産後うつ病診断のための日本版尺度ならびに取扱説明の成案を得た。マタニティーブルーズの実態をロンドン在住日本人と本邦婦人との比較検討を行った結果、ロンドンデータは英国人のそれと同程度であり、本邦発生の約２－３倍であった。

２．妊産婦の精神面支援が分娩に及ぼす影響は？

胎児異常の告知と妊婦の受容性を不安測定尺度を用いて調査した結果、長期入院自体の及ぼす影響が大であった。麻酔分娩の説明面接と妊婦の受容性を事前事後の意識調査によって検討した結果、高齢産婦において事前事後の差異が大で、精神的ハイリスク集団とみなされた。合併症妊婦に対し、面接による産科的指導・精神面支援を行い、不安・抑鬱尺度により検討した結果、支援的介入により測定結果が変動することが分かり、精神面支援のポジティブな効果が示唆された。

３．母児同室の効果は？

母児同室制の優劣について事前面接と事後意識調査により初・経産婦の比較を行った結果、母児同室は母親にとって精神的肉体的につらく、ことに初産婦でこの傾向が顕著であった。母児同室制の運用に対して、妊婦・助産婦・医師の階層別に大規模意識調査を行った結果、妊婦の受容性は良好、医師より助産婦が積極的、また要員確保、対感染対策、設備備品に対する不安などが分かった。

【身出し語】

１．マタニティーブルーズ、産後うつ病、診断基準、在英邦人

２．精神面支援、合併症妊娠、麻酔分娩

３．母児同室制、意識調査

【研究方法】

１．マタニティーブルーズと産後うつ病に関する研究

１)マタニティーブルーズと産後うつ病診断のための日本版尺度を作成する目的で、「産後精神障害の評価法」と題してオープンフォーラムを開催した。「周産期の精神症状の評価法の継時的妥当性の変化について」、「妊産褥婦の心理的問題とケア」の基調講演後、「産褥期の精神症状の評価方法と産科臨床における有用性について（マタニティーブルーズの定義と評価尺度一試案)」、「産後うつ病の診断におけるＥＰＤＳの信頼性と妥当性について」について討論を行った。

２)マタニティーブルーズと産後うつ病の実態を把握する目的で、ロンドン在住日本人と本邦婦人との比較検討を行った。方法は、妊娠後期、出産後５日間、１カ月、３カ月の気分の変化について、自己記入式質問表と面接調査を前方視的に行った。

２．妊産婦の精神面支援に関する研究

１)胎児異常の告知と妊婦の受容性を不安測定尺度（STAI-Stateスコア）を用いて調査し、併せて精神科医の面接による個別精神面支援を行い、事前事後における状態不安を比較検討した。

２)精神面支援の基礎資料を求めるために、麻酔分娩経験に対する妊婦の受容性を分娩前後の自己評価点による意識調査を行い、比較検討した。

３)母体合併症を有する妊産婦に対し、面接による産科的指導・精神面支援を行い、妊娠初期・中期・産後５日間・１ケ月に不安・抑鬱尺度（STAI-Stateスコア、Stein、EPDS）を用いて検討した。

３．母児同室制に関する研究

１)母児同室制に対する意識調査を妊娠36週以降・出産後５日の妊産婦に行い、母児同室を経験する前後の意識の変化を初・経産婦別に比較した。

2)母児同室制の関心・評価・実施上の問題点に関して、妊婦・看護婦・助産婦・医師の階層別に大規模意識調査を行った。

【結果】

1．マタニティーブルーズと産後うつ病に関する研究

1)オープンフォーラムにおける討論を経て、マタニティーブルーズと産後うつ病診断のための日本版尺度ならびに取扱説明の成案（平成5年度研究報告書に資料として掲載）を得た。

2)マタニティーブルーズの頻度はロンドン在住日本人50%・本邦婦人23%と、ロンドンデータは英国人のそれと同程度であり、本邦発生の約2-3倍であった。本邦（三重県）における産後うつ病の頻度は0.34／1000で、欧米の1.8-2.2／1000に比し約1／10であった。発症時期は本邦では産後3カ月以内、ロンドン在住日本人では産後1カ月が多く、差異を認めた。マタニティーブルーズと発症の素因との関連は分娩様式に認められ、帝王切開あるいは鉗子分娩を経験した母親はマタニティーブルーズ得点が高く、しかも産後3ケ月に児に対するネガティブな感情を抱いている傾向があった。また、産後うつ病の発症とマタニティーブルーズの高得点・難産等の分娩異常の間に相関が認められた。

2．妊産婦の精神面支援に関する研究

1)母体あるいは胎児合併症を有する妊婦は状態不安得点が高く（STAI-Stateスコア：母体合併症群44.1、胎児合併症群48.0、対照群36.5)、ことに胎児合併症を有し長期入院が必要な妊婦のSTAI-Stateスコアは52.5とこの傾向が顕著であった。面接による精神支援介入の効果は状態不安が大であるSTAI-Stateスコア51点以上の妊婦で有効であった。

2)分娩経験の前後での妊産婦の期待度・満足度の自己評価は、経産婦（92.2点）では初産婦（80.2点）に比して高得点であった。最も低得点であったのは35歳以上の高齢初産婦群（76.3点）で、平均年齢は37.1歳であった。

3)妊娠中の不安状態・マタニティーブルーズ・産後うつ病の得点ならびに頻度は、母体合併症群と対照群で差異は認められず、面接による産科的指導・精神面支援が有効であることが示唆された。

3．母児同室制に関する研究

1)母児同室は、新生児にとって良いことであるという意識をほぼ全妊婦が持っていたが、産褥婦では母親にとっては実際に経験すると精神的肉体的につらく、ことに初産婦でこの傾向が顕著であった。

2)母児同室制採用率は63.6%（199／313）であった。母児同室制の受容性は妊婦では良好、医師より助産婦が積極的であった。母児同室制を採用する上での問題点は、設備が不備、看護婦・助産婦の不足、褥婦の負担、新生児感染の危惧であった。

【考察】

妊産婦をとりまく社会環境が近年大きく変化するなかで、母子の精神保健の重要性が注目されてきている。しかしながら、本邦では分娩に伴う精神障害に関した特定地域での正確な実態すら把握されておらず、欧米の母子精神保健行政に比し大きく立ち遅れている。今後わが国でも欧米並みに核家族化が進行し、地域での精神面支援体制づくりのあり方が問題となることが予想される。したがって、本邦における産後精神障害の実態を把握するために広範囲な疫学調査を行うことは重要な課題のひとつである。

マタニティーブルーズと産後うつ病のわが国での頻度は欧米と比して低いことが分かった。しかしながら、マタニティーブルーズの頻度はロンドン在住日本人では英国人のそれと同程度であった。妊娠・分娩は女性にとって人生の大きなライフイベントであるが、それが夫の仕事のために海外での出産を迎えなければならない女性にとっては特に大きな問題になりうる。ロンドンの対象者はほとんどが日本人企業の家族である。彼女らは、言葉をはじめとした海外での生活に対する不安の打開策として、少人数ではあるが強く結束したコミュニティーをつくり生活しているのが現状である。さらに妊娠・分娩に至れば、このコミュニティーを基盤に地域の助産婦や産婦人科医師と十分にコミュニケートできる状況にあり、核家族化の進んだ本邦婦人に比し不安要素は少くとも大きくはないと考えられる。このような英国の実態に照らせば、マタニティーブルーズの頻度がロンドン在住日本人は英国人のそれと同程度であり、本邦発生の約2－3倍であった事実は、単純に海外生活に対する不安に帰するわけにはいかない。本邦婦人は、日本人特有の伝統あるいは道徳等に纏わる素地を有し、一方では産後精神病の潜在能力的リスクを抱え、外部環境の変化がこの結果を惹起している可能性が考えられる。また、本年度の研究で産後うつ病の発症とマタニティーブルーズの相関が分かった。このことから、今後わが国の欧米化にともなったマタニティーブルーズの増加、惹いては産後うつ病の増加という母子精神保健の変化が想定され、母子ユニット

（英国母子ユニットの設備は育児室・遊戯室・談話室、スタッフは医師・心理士・看護婦・ソーシャルワーカー・作業療法士・保健婦で構成されている）設置の是非について見直すことも必要である。

このような日英比較の結果はわが国の周産期をとりまく独自の要因と関連していることも考えられ、比較文化的観点からも興味深い。わが国の社会文化的背景や医療制度、母子精神保健行政の相違などさまざまな要因が関連していると思われるが、この問題は次年度の調査のなかで明らかにする予定である。

本年度の大きな成果として、マタニティーブルーズと産後うつ病診断のための日本版尺度ならびに取扱説明の成案を得た。これを用いて、産後精神病のスクリーニングシステムを多施設で行うことができる。現在まで、都道府県など比較的大きな特定地域を対象とした産後精神障害の疫学調査は皆無である。本年度は特定の県単位での悉皆調査により大筋の実態が分かったが、次年度は今回作成した統一プロトコールに沿って全国調査を行い、母子精神保健行政の貴重な資料を求める予定である。併せて、産科的関連因子や転帰を縦断調査することにより、妊産婦の時期別によるスクリーニング・精神面支援の是非および方策を提言し、前述した医療行政対策を要する母子ユニット設置の必要性について見直す。

妊産婦の精神面支援については、胎児異常の告知と妊婦の受容性を不安測定尺度を用いて調査した結果、長期入院自体の及ぼす影響が大であることが分かった。また、母体および胎児合併症を有する妊婦に対し、面接による産科的指導・精神面支援を行い、不安・抑鬱尺度により検討した結果、支援的介入により測定結果が変動することが分かり、精神面支援のポジティブな効果が示唆された。このことから、STAI不安測定尺度による評価法は妊産婦の精神不安状態を反映しており、この方法をスクリーニングとして用いることによって精神面支援の対象の選別が可能である。精神面支援の方法は、本年度は施設別に個別指導および集団指導を行ったが、行政的活用を考案するには未だ充分ではない。しかし、少なくとも面接などの精神支援介入の有効性が明らかになりつつあるので、次年度は初期目標の安産効果をねらうというより、産前産後の妊産婦精神・身体的健康に対する効果に方向を転じて検討を行い、精神面支援メニューの策定と妊婦健診における応用の道を拓く予定である。

母児同室について、その優劣について事前面接と事後意識調査により初・経産婦の比較を行った結果、母児同室は母親にとって精神的肉体的につらく、ことに初産婦でこの傾向が顕著であった。併せてその運用に対して、妊婦・助産婦・医師の階層別に大規模意識調査を行った結果、妊婦の受容性は良好、医師より助産婦が積極的、また要員確保、対感染対策、設備備品に対する不安などが分かった。このように、母児同室制は理想的な方向であるとの理解は広く普及している現状にあるにもかかわらず、効用の具体性を示し得ないでいることに問題がある。そこで、次年度は社会教育効果を期待して活用する過程で必要な修正を加える手順を選ぶべきと考える。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

【要約】
本年度は3項目のリサーチクエスチョンに対して研究を行った。
1.マタニティーブルーズなど産後精神障害の実態と対策は?
オープンフォーラムを開催し、討論を経てマタニティーブルーズと産後うつ病診断のための日本版尺度ならびに取扱説明の成案を得た。マタニティーブルーズの実態をロンドン在住日本人と本邦婦人との比較検討を行った結果、ロンドンデータは英国人のそれと同程度であり、本邦発生の約2-3倍であった。
2.妊産婦の精神面支援が分娩に及ぼす影響は?
胎児異常の告知と妊婦の受容性を不安測定尺度を用いて調査した結果、長期入院自体の及ぼす影響が大であった。麻酔分娩の説明面接と妊婦の受容性を事前事後の意識調査によって検討した結果、高齢産婦において事前事後の差異が大で、精神的ハイリスク集団とみなされた。合併症妊婦に対し、面接による産科的指導・精神面支援を行い、不安・抑鬱尺度により検討した結果、支援的介入により測定結果が変動することが分かり、精神面支援のポジティブな効果が示唆された。
3.母児同室の効果は?
母児同室制の優劣について事前面接と事後意識調査により初・経産婦の比較を行った結果、母児同室は母親にとって精神的肉体的につらく、ことに初産婦でこの傾向が顕著であった。母児同室制の運用に対して、妊婦・助産婦・医師の階層別に大規模意識調査を行った結果、妊婦の受容性は良好、医師より助産婦が積極的、また要員確保、対感染対策、設備備品に対する不安などが分かった。